

次期基本方針・総合戦略に関するご意見の概要について
【第2回「ともに未来を創るワーキンググループ」会議】

No	ご意見・ご提案の概要
次期基本方針・総合戦略全般について	
1	たくさんの政策が盛り込まれてる。知事の公約をこういうふうに盛り込み、運営していくのは本当に大変なことだと思う。そういった中で、すべてを行政でやることは難しい。我々のスローガンは、くまもと新時代ともに未来へ。「ともに」というところがキーワードだと思っている。今日は本当にそれを体現したような会議だなと思っており、民間側からのアイデアがあり、それをどういう形で、制約や制度的な課題を、知恵を合わせて乗り越えていくか。すごいなと思ったのが、資源に限りがあるなかで、空いてるものをどういうふうに組み合わせたらいいのか、もっとこうみんなのためになるよね、でも制度的なところをどうやったら乗り越えられますかね知事、みたいな、民と官と理想的な話し合いができたのではないかなと思う。 この政策を実現していくにあたり、民間でしか出てこないアイデアもたくさんあると思うので、民と官と両方で手を携えて、実現に取り組んでいければと思う。
2	総合戦略ということで、非常に多岐にわたるところで各委員が発言されたことも踏まえ、これだけのものをお作りいただき感謝。
3	施策の一番に「こどもたちが笑顔で育つ熊本」と入っていたこと自体がもう、福祉教育に関わる者として、涙が出るぐらい嬉しかった。大体これは多分3番とか4番に来てしまうところが、1番で本当にありがたい。
4	前回、社会のあり方をどうしていくかを考えないと、もう高齢者介護という側面だけではこれから語れないといったことを言わせていただき、手元資料の方にも、意見一覧の方にも、熊本全体がやさしい人たちが溢れる教育のあり方みたいなことを発言させていただき、それに関しても基本方針・総合戦略の中で取り上げていただくということで大変感謝。
5	総合戦略で一番いいなと思うのが、世界に挑戦する県というところ。やはり挑戦するということには、必ず人の魅力というのが出ており、そこにはみんなが寄ってくるし、私も挑戦している人の話を聞いたり、そういったことが重要だと思っている。すべてのものを維持するのにも挑戦という言葉がないとなかなか難しいのではと考えている。
6	非常に網羅的に、素晴らしい内容と思う。これが表層的なものにならない、実際に実効性あるものにしていく必要がある。
7	総合戦略の中で高齢者までスポットに当てていただき、感謝申し上げます。
県民が主人公の県政について	
8	県民が主人公の県政を進めるということに関して、これは簡単そうで、とても難易度が高いと感じる。県民が主人公だと、県民が本当に自分で思ってもらわないとそうならない。知事がされているお出かけ知事室やともに未来を語る会、本当に素晴らしい活動だと思うが、県民の方々は、その意見を聞いてくれるだけではなく、これが成果に繋がるプロセスや成果のところまで可視化して、オープンにして欲しいと望んでいると思う。写真や主な意見等をホームページにアップされているが、これをぜひ継続していただき、県民自身が本当に、一緒に未来を作っているんだと実感してもらい、それがスパイラルになればと考えている。

こども支援、子育て支援について

9	前回、子育て支援というポイントに加え、こどもへの支援を併記いただくようお願いしたところ。どちらが主だとかそういう議論ではなく、お互い相互に補完する関係で、どちらも大事。ただ、色々な事業の性格的に、子育て支援、やっぱり目の前に困ってるから、何とかしようというところはそれも大切だと思っている。 こどもへの支援というのは未来への投資になると思っており、これが今後の2027年度までの計画というふうになっているが、その後も引き続き同じような形で、変えるところは変えつつ、基本的なところは継承していただけるような形の、長いスパンでこどもへの支援をご検討いただくと、非常にありがたい。 これ(基本方針・総合戦略)をこどもたちに示し、絶対未来明るいからねと、そういう実感をこどもたちに見せられるような大人でありたいと思っている。
10	「特に支援が必要なこどもへの支援」について、どういう支援を指すのかというもあるが、どうすればその支援がいろんなこどもに届くのか、どのタイミングで支援をすることが、こどもや親御さんにとって一番タイムリーなのか、一番困っている時に手助けができるのかを考えると、やはり1歳半までだと思う。 お子さんを授かってから不安な時期を過ごし、そして1歳半まで、うちのこどもは大丈夫なのかと思いながら、子育て支援センターに行き、周りの子と比べたりしながら、お母さんたちは不安と希望の両方を持たれている。1歳半健診で気になる子は、そのあとも気になることは事実として分かっている。ただそこを、保健師さんだったり関わる人たちが、お母さんを傷つけてしまうから言えない、これも事実として実際ある。傷つけてしまうから言えない気持ちも分かるので、どのタイミングで親御さんの手助けができるかを考えると、やはり妊娠中かと思う。妊娠中に、例えば、発達特性について学んでいたりと、育てにくいことがあったときに、どこに相談していいのかとか、そして福祉制度とかも妊娠中の教育の1つとして行っていると、困ったときに私1人で頑張らなくていいんだと、この人たちと一緒に子育てしてくれると。そうすると保健師も、あの時、妊娠中にお知らせしていたのはこういうことだったから一緒に相談に行かないかと声かけができるんじゃないかと。 こどもとの関わり方が分からないお母さんたちも多く、愛着の形成も含めて、妊娠中にこどもとの関わり方、こどもはどんなふうで遊んで育っていくのか、どんなことがこどもは嬉しいのかとか、今や具体的に言わないと、新しくお母さんになる人たちは分からないというのが現状なので、その分からないお母さんたちを支えていくということも、これから具体的にしていかなければいけない世の中になったと思う。
11	アメリカでは通常に行っている、学校作業療法というものがある。学校に保健室があるように、同様に作業療法士という専門家がいて、こどもたちが困ったことだけではなく、こんなことを実現したいという時にすぐ手助けができる。そして、学校の先生たちが発達特性を持った子たちにどう関わっていいか分からないときも、専門家が一緒にクラスに入って、どれだけでもサポートできるというのを聞いている。今、飛騨市が先駆的にやり始めているので、熊本も一緒に学びながらやっていけたらと思う。
こどもたちへの発信について	
12	基本理念の「県民みんなが安心して笑顔になり、持続的で活力あふれる熊本の未来をともに創る」、もう本当にこれをもうやりたいと思っているところ。こどもの観点から見たときに、これをこどもになんて説明しようかなと。これは多分大人が書く文章だなと。こどもに、これをどういうふうに私たちは伝えればいいかという、まだ伝わる言葉が思いついていないが。 こどもの意見を聞いていくというところが、こども家庭庁とか含めての基本的な方針になっているので、ぜひ、県の基本方針、総合戦略についても、こどもにわかるような、そういったものの併せて作っていただき、こどものうちから、こういうふうを考えてるんだよ、という未来を指し示す、そういったことをやっていきたい。

こどもたちの体験の場について

13

今困ってることを話させてもらおうと、普段、学童保育ということで8月の夏休みの期間中、1日こどもたちと過ごす生活をしているが、外出できないくらい暑い。今ある小学校、例えばこどもが200名来ており、教室が5個あって、1つの箇所に40人。200人いると、基本的に身動きができなくなってしまうため、移動してどこかで体験の場というのは非常に難しい。
さっき交通の問題もあったが、何か移動手段があると助かる。200人とか連れて来れるかとか思ったりするし、体育館を借りようと学校に行くが、体育館行ってみるとものすごく暑い。とてもじゃないが人が過ごす環境ではない。結局、教室でもエアコンの中で勉強してるように、ある程度空調が効かないともう生活ができない状況になっており、そういう意味で、場所がない。こどもたちは、経済的にどうかは置いておいても、学童保育がそこに受け皿になって、様々な体験活動をしており、その中で、こどもが主体的に活動できるようにというのはどこもやっていると。ただ、やはり限界があり、交通の問題、場所の問題、もう外が暑くてとても行けない。何かそこを皆さんこれからのアイデアで解決していきたいというのがこれからやりたいところ。

14

今年の夏休みの前に、夏休みの短縮や廃止を求める、困窮世帯を対象にした調査の記事を掲載した。50%が希望しているという、新聞社的には衝撃的な記事。経済的な理由で、長期の期間に楽しめるような経験をさせることができない、という理由がかなりの割合で高く、1番目か2番目ぐらいに多かった。そういう経済的な余裕がない、体験格差という言葉も一般的になっているが、そういったこどもたちに対して体験をする場が必要かなと思う。参考になる事例として、こうのとりのゆりかごに預けられた、宮津航一さんたちがこども大学っていうのをやっておられて、先日参加したが、学校の枠組みを超えて、初めて会うこどもたちがワークショップ形式で色々なことを学んでいく、生命のことや、人権に繋がるような、家族って何だろうとか、宮津君ならではの経験があるからこそその問いかけに、中学1年生ぐらいまでの子が答えを学びながら。本当にいい体験だと思った。こども大学というのは海外から入ってきた取組みで、他県では行政の支援もあっている。参考の一例だが、そういった学校の枠組みを超えた、場づくりというのぜひ行ってほしい。

学校教育について

15

学校以外にも色々なこどもの居場所が推進されており、文科省も力を入れている。県でもフリースクールがどんどん立ち上がっており、フリースクール協議会も昨年度設立され、認証制度を目指して取り組んでいる。居場所を継続するには、認証制度はすごく大事であり、県が先駆けて設立委員会をやっていただきたい。
同じ環境で生まれたり育ったりしたこどもは1人としておらず、様々な立場の子が同じように教育を受けるということが大事だと思う。フリースクールも大事だが、公教育の大事さというのがすごくあり、一緒に経験を積むこと、探求・対話がどれだけ重要かというのは、誰しもが分かっていること。午前中授業にして、昼からすべて体験活動に公教育がするというぐらいで、県が旗上げてするぐらいでないと、公教育は一生変わらないと思う。今、世田谷の小学校はそれを実施することが決まってやっている。もう前例があるのであれば、いっそ熊本県もやらないか。こどもたちが学校に行きたいって言うてもらふことはとても大事で、公教育に行ってる小学生で、学校が楽しいなんて言いながら行くこどもたちってあまりいるのかなと。行かなければいけないから行っているこどもたちが大半なので、毎日こどもたちに楽しく過ごしてもらうためには、教育が楽しいと思ってもらう。そしてこどもたち全員にそう思うってもらうためにも、公教育もいっそ変えませんかと言いたい。

16	高校におけるグローバルな人材の育成の整備について。県内には選択肢がなかなか無いというところで、高校から県外に出て行く。そういうのが県内にあれば、少なくとも高校までは熊本にいられる。あるいは、外からやってこられた方が、こどもの教育、ここまでは心配なくて熊本にいられるよねということで、教育の場にそういう多様な人材がいることでお互い刺激を受けあって。色々な方が熊本に來られて、そこで満足されるような取組みが、教育においても必要ではないかと思う。
17	スーパーサイエンスハイスクールに指定されている宇土高校について。とても魅力的で、詰め込み型ではなく、探究心だったり、ウトウトタイムと言って昼休みに10分寝ると集中できるとか、あとはもう街中に出て色々な活動をされていたり、僕からするととても魅力的な先生もいて、良い高校。なのに、240人の定員に対して180数人で、どんどん下がってきている。親がどうしても熊高受かったと喜んでそっちに行ったりとか、やっぱりこの大学だったりとか、あと私立の無償化だったりとかして、こんなに魅力的な高校なのにそれでも定員割れしてしまうんだと。どうしようもないのかなみたいな。先生と話していても、いくらこう魅力を上げてても難しいのかなと。
18	例えば教室がこれから余っていくときに、その余った教室をビジネスで活用するとか、もう街全体も何かビジネス的な視点も入れて、教育だけではなくて、社会と高校生がどう交わっていくのかという拠点にするとか、場合によってはそこに高齢者の人たちを集めて何かするとか、ちょっと総合的に考えていかないと、県立高校の魅力向上というか県立高校を軸としながらまちをどうして行くかぐらい広く考えていかないと、もうどうしようもないところにももしかしたら来てるのかなというのは少し感じている。
19	私の地域の県立高校では、1学年が20人規模の高校になっており、廃校になるのではないかと。県立高校で特化した魅力を見つけるのは難しいとは思いますが、高森高校のような、地域でもうまいくような事例が実際に出ています。高校がなくなる地域からすると、閉塞感や、廃校に伴いインフラだったりがなくなっていくという想像もつくため、できる限り、高校を残すために何をするということを、地域も含めた中で検討していただければ。地域で育った方が地域に就職する、この県に残る、となることが一番目指すところかと思っている。
教育の選択肢について	
20	海外から東京に戻ってきた後、熊本に戻るときに一番もめたのは、こどもの学校問題。熊本インターナショナルスクールに通わせているが、選択肢としては非常に少ない。
21	インターナショナルスクールについて。海外から熊本に來られて、単身赴任ではなく家族で住んでもらうためのベースとなるインフラだと思ひ、ひいては熊本のこどもたちに、今までにない未来を作っていくものだと思う。色々な方の努力で、すでにもう2つオープンしており、熊大付属も今度オープンされると。特徴ある学校ができて、それぞれ行くところがあったことは喜ばしいが、それで満足するのではなく、その特徴を伸ばして海外から來られる方に対する選択肢を増やし、満足度を上げていく。それこそ中身に魂を込めるというか、深掘りをしていき、と教育充実をしていくことが重要じゃないかと考えている。 TSMCの方が來て入る場所がないという状況は乗り越えたと思うが、その次の段階に、例えば熊本市は私立の小学校がなかったりする。そういう意味で、海外だけではなく、例えば東京から來るにしても、教育の選択肢はもっとあるはずだという目線、皆さんいらっしゃると思う。

福祉教育について

- 大きく福祉という領域でとらえたときに、福祉教育というのをどう目指すのか、根付かせていくのかというのを、今一度、「やっぱり熊本教育はすごいな」と、「熊本の人に会うとすごく親切にしてくれる」とか、「熊本に行くと安心して暮らせる」というのが、10年後なり20年後なり30年後なり、言ってもらえることが熊本の何かブランディングに繋がるのであれば、そういったものをしっかりと教育ベースの中で擦り込んでいける工夫というのが必要ではないかと思う。
- 22 ということは、それを伝える大人が、それをちゃんと理解していなければいけない。学校の先生だけでなく、親御さんや色々な方々がそういったことをきちっと理解していくことが大事。情報提供として、地域共生社会を支える人材養成研修が近々始まる。厚生労働省の政策の統括室グリップでテキストも作られており、これが社協において、社協から地域においていく。そういった人材養成の研修のスキームをうまく活用するとか、そういったことで根づいていけばいいと思う。

環境教育について

- 23 こどもたちが減っている中で、いかに良い教育をするかと点はとても大事だなと思っている。その中でも、特に環境教育の推進。これはぜひ、明文化して入れていくべき熊本教育と思っている。環境教育と言ったときに、大きく4つ。地下水問題、地下水に紐づいて江津湖、水との繋がりで水俣病のこと、そして地球温暖化。熊本としてとても重要で力を入れてきている部分でもあるし、地球温暖化というところから実はつながって、二酸化炭素を減らすという緩和策と、温暖化により発生する災害等に備えるという適応策という考え方があって、その防災教育は直接つながっている。特に九州は自然災害も多いので、環境教育の推進というところをぜひ入れて、防災教育ともつながるところでやっていく必要があるのではないか。
- 24 こういう環境教育を県はどんな予算からやっているのかを見ると、今は環境保全基金みたいなものを、最初に4億ぐらい立ち上げ、2027年までという計画でされている。水に関する教育は基金から結構予算が出ている。熊本の小学校5年生の方はみんな水俣を学ぶ。そういうところでももっと環境教育の推進をしていくと。環境教育の推進は、水俣病問題への対応にも直接ダイレクトにつながっていくと思う。水俣病の患者さん方への対応は厚くしていく必要があるが、教訓としても伝えていく必要があると思っている。環境保全基金がなくなったらなくなりそうな事業がたくさんある。そこも含めた予算組みを手厚くしていくことによって、水俣病問題への対応にも繋がる。
- 25 小学校でインドネシアのゴロンタロというところと中継でつないで授業をするが、川の水銀汚染が始まっているという地域で、まさに何十年前の熊本と似たようなことが起き始めている。水俣病をインドネシアの先生は誰も知らない。小学校のこどもたちには、水俣の学びをインドネシアのこどもたちに話すという場面を入れる予定。学びを発信していくというところが、今後の施策の中でも、ぜひやっていく必要がある。
- 26 江津湖の水の汚れは減ったが、硝酸性窒素は増えていて、飲めなくなるかもしれないという問題もある。しっかりみんなが理解していくというところを進めていただきたい。
- 27 環境教育、防災教育、福祉教育、芸術文化とか、ぜひここは伝えたいというところを形にしてやっていくっていうようにできたらと思う。その中でも特に環境に関しては、熊本は頑張ってきたからこそ維持できているというところは、教育しないと忘れてしまう。環境教育への予算というところで、ぜひ力強くあったらいいなと思う。

公共交通、渋滞対策について

28 鉄道、特に豊肥本線の強化をまず一番最初に取り組んでいただきたい。空港アクセス鉄道と一体となって、県民と来訪者の方のメインルートとして、豊肥本線を位置付けていただきたい。福岡の篠栗線というローカル線は、40年ぐらい前の当時、豊肥本線と同じぐらいの利用者数だった。その時に、JRさんが本数をほぼ倍増されており、現在の利用者は2.5倍になった。福岡に行かれたら篠栗線、ぜひ直方駅に行ってみていただきたいが、ものすごい沿線も住宅地が増えて、非常に沿線価値が上がっている。

ぜひこれをお手本にいただき、熊本においても、増便と増結。まだ2両編成が走っている。4編成ぐらいで、本数も今30分に1本ぐらいだが、15分に一本ぐらい。ラッシュ時は今10分に1本になっているが、昼間も増便していただき、ぜひ地域の価値を高める鉄道として活用していただきたい。本線電化の際、熊本県さんとJRさんが一緒になって取り組みをされており、資産保有会社とかお持ちかと思うので、この辺りも活用していただき、早い段階で交渉を始めていただきたい。

29 セミコン、TSMCアクセスについて、「公共交通が一番速い」を実現してほしい。LRT路面電車でも、BRT専用バスでも、今度6車線にする道路を2車線バス専用にする形で何でもいい。とにかく公共交通が一番速いという形を作っていただきたい。通勤者や地域住民に、渋滞に並ぶより良い、渋滞に並ぶより便利、という手段を提供していただかないことには、結局渋滞に並ぶしかない。これでは渋滞解決しないということになる。

一部報道で、台湾の経済部長が、今の渋滞に対して大きな不安を持っているという話をされている。せっかく今、ムードでTSMC盛り上がっているところで、渋滞が水を差すということがないように、この公共交通の整備というのをぜひ台湾の皆さんへの答えとしても、活用していただきたい。道路だけじゃない、公共交通をやるということをぜひアピールしていただきたい。

30 現在の地域公共交通計画は、非常に人口減少や高齢化を意識した計画になっているが、合志、大津、菊陽などが抱えている課題はそういった課題ではない。人口が増えており、高齢化もそこまでまだ進んでいない。今やりたいのは、今来ている人達に対する渋滞対策であり、渋滞という大きな魚をフルーツナイフでさばいて、というのが、今の合志、菊陽、大津ではないか。各地域が実情に合った取り組みができるよう、都市交通マスタープランなどにぜひ、車1割削減、渋滞半減、公共交通2倍というのを反映させていただき、それを基に、各市町村への連携と支援を行っていただきたい。

31 公共交通の必要性として、渋滞問題だけではない、まちの魅力としての話をさせてほしい。熊本は車社会で、車を持つのが当たり前。高校卒業後、免許を持つ。どういうことかと言うと、車を持つコストを我々は払い続けている。これは、可処分所得が減るということ。他都市との比較がいいか分からないが、給料が高く、公共交通のある福岡と、給料が低く、車を持たなければいけない熊本。どちらが選ばれるまちか。この問題は、人材確保や子育ての問題、文化振興、要するに豊かな暮らしをするという意味での所得という意味で、色々なところに結びつくのではと思っている。ぜひ、公共交通というツールを磨き上げて、熊本のインフラとして実装して、魅力あるまちにしていけたと考えている。

32 都市圏の交通問題と、過疎地の交通問題。これは切り分けなければいけない。政令市の熊本市は熊本市でやっているが、他の市町村において、この都市圏の交通問題と、地方過疎地の交通問題が切り分けられていないことが問題。山鹿でも地域公共交通計画を作っておられるはずで、コミュニティバスやデマンドバスを1日2本とか3本走らせている。誰が1日1本のバスに乗るのか、という話。老人福祉センターに行きたいおじいちゃんが10時のデイサービスや催しに行くためにしか使うことができない。おそらく、1便当たりの利用者数は1とか2。合志市に至っては定時運行バスの利用率は1日1便1人以下。要するに、1便1人以下ということは公共交通として成立していない。それはもう変な話、ウーバーだとか、ライドシェアだとか、そういったマンツーマンの交通でやってしまえばいいという話だが、今の公共交通の考え方がとにかく何か、乗り合いでとかそういうもので、何とかある予算でやってくださいという感じで、何となくミスマッチで合っていない。

熊本で移動すると、交通センターまでは行ける。桜町までは行ける。桜町から、例えば山鹿だったら山鹿のバスセンターまでは何とか行ける。じゃあ鹿央町に行こうと思ったときに、さてどうしようとなる。駅前からの足、バスターミナルが確か全くないという状況があり、やっぱりここを切り分けていって、まず幹と柱になるべき交通に関しては、太くしないといけない。ここも不便なわけでは。要するに、足りなくて混雑していたりとか、便数が少ないから使えない、というのが都市交通の問題としてある。

33	一方で、各地方都市までたどり着いたら、その先の足がない。グーグル検索すると最速の交通機関が徒歩と出てきたりする。これは合志市、菊陽町でも普通に出る。山鹿や菊池などの人口5、6万いる地域でも、交通機関がないという状態になっている。このあたりは、問題を切り分けて、幹をガツと太くするということで、ここはどうしてもお金がかかるし、インフラなので投資が必要となる。 都市交通に関しては、もうちょっと、投資が必要だという考え方をやっていくことと、過疎地の交通に関してはちょっと発想を変えて細々やっていくのではなくて、新しいライドシェアの発想だとか、最近だと病院のバスを使ってとか、自動車学校のバスを使ってとか、そういう地域にある浮いている遊休の乗り物を使って活用する。乗り合いや循環バスなどの仕組み作りに取り組んでいるところもあるようなので、この辺りの二方面作戦でぜひ、県の皆さんや私たちみんなでアイデアを出し合って、良い交通というのが作っていかれたら考える。
34	特に海外から来られる際の交通の問題について。一番先に足を踏み入れる場所で多いのは空港だと思う。海外の人が直行便でいきなり熊本空港にやってきて、例えば通貨も日本円を持ってるかどうか分からない中で、タクシーどうするのかというのが一番初めに起こる。海外から来られる方も大変。オーストラリアやシンガポールでは、どこの空港も、市内へのアクセスが、電車がたくさん通っている訳でもなく、例えばライドシェア。シンガポールでびっくりするのはライドシェアの1番から10番まで乗り場があり、予約するとあなたの車はライドシェア乗り場3番に行きますよとか出てくる。要は同じアプリで、通貨換算や言葉が通じなくても、マップをピッとすれば運転手さんがそこに連れていってくれる。そういうことが非常にストレスがないんだと海外に行って感じた。 例えば、海外を飛び回っているような人たちが熊本にやってきて、タクシーが全然ないとか。空港アクセス線も今一生懸命やっておられるが、10年かかるその間をどうやってつないでいくか。来た人たちにストレスを感じさせないように、できればホテルに着くところまでスムーズにやれるように。
35	熊本都市圏の渋滞対策について、熊日でも移動の足を考えるという連載を始めており、9月に掲載した記事で、渋滞都市の脱出の鍵は公共交通シフトという提言を紹介した。東京大学の研究グループの調査で、具体的に言うと、車の量を今より1割削減すれば渋滞は半減できるという、数字の目安も示されている。春にアースウィークの一環として、ノーマイカーデーというような取組みをされているが、こういった車そのものの量を減らす対策というのを、リーダーシップをとってやっていただきたい。バスレーンの設置、信号機の制御など、渋滞対策は色々な方法があると思うが、車そのものを減らす対策というのが求められていると思う。
36	ヤフーニュースで山鹿は陸の孤島と書かれていた。そこまではないだろうという話だが、2次交通がないところについても、ライドシェアだったり、そういったところの取組みの中で、我々も何とか充実させたいなと思いながら話をしている。
37	スクールバスは朝と夕方だけしか使わず、普段の時間は使っていないが、ルールが結構がんじがらめで使えないみたいな話があり、土日は全く動かないと。そういった中で、例えば、土日にも子どもたちが合宿などで県外から来てくれたりするが、足がないという話だったり、そういったそのミスマッチみたいなところが課題としてある。 発想柔軟にそういった手についても是々非々でちゃんと考えるというか、既存のルールがあるからできませんではなく、どういうふうにやっていくかというのはまさに、イノベーションにつながったりする。新しい取組みで、そういったところをしっかりとっていく必要がある。デザインやプロデュースというのが必要だと思っているし、それができるのは自治体行政の皆さんだと感じる。

ドライバー確保に係るルール改定について

38

高齢者介護領域で今年の4月にルール改定があった。デイサービスの送迎のドライバー確保が課題になっており、厚労省の今回の報酬改定の中で、A事業所とB事業所がドライバーをシェアしていいよという緩和を行った。高齢者施設と高齢者施設ではなく、障がいと高齢であっても、このドライバーが双方と雇用契約を行ってれば、例えば地域を回りながらA事業所の利用者を乗せて、その次にB事業所の利用者を乗せて、それぞれをそれぞれに降ろしていいですよ、という緩和が行われている。
緩和に至ったプロセスとか、その理屈の立て方とかが、何か1つ参考になるかもしれない。介護保険法と障害福祉の施策は別物だけれど、そこを良しとしたという流れがある。

防災について

39

防災を進めていく上で重要なのは、ハード対策だけを打ち出していくのではなく、ソフト対策もしっかりと同じように打ち出していくということだと感じる。
ハード対策ばかりやってしまうと、それがあから大丈夫だろうということで、災害に遭う頻度も減る中で、防災意識の低下、油断に繋がる。八代市坂本町で4年前の災害時にあったことだが、数年前に堤防が数メートルもかさ上げされたから大丈夫だろうという思いが皆さんにあり、避難が遅れたという方がかなりいらした。堤防から水が越え始めてのを見て初めて避難を始めるという方も多かった。

40

緑の流域治水も進められていくということだが、現在の防災教育の課題として、防災に興味がある先生がいるところではやっている、そうじゃないところではやっていない。そのため、教育の偏りがあったり、その先生がいなくなるとその学校での防災教育の継続が終わってしまう。

41

全体として防災教育っていうものを県内で根付かせる、流域でやっていくということも大事だと考える。各市町村で進めていくというよりは、例えば熊本市で、白川が氾濫するとなった時は阿蘇の雨が重要だし、八代市の球磨川が氾濫するとなった時も上流の雨が大事。

42

川辺川ダムを作るにしても、五木村や相良村の御協力なしには下流の地域の命は守れないということもあり、流域全体で防災学習を進めていくことが大切。防災学習教育というものをこどもの頃からやっていくことが文化として、この県に根付いていき、ゆくゆくは10年後、20年後に防災に強い県、そして人を作っていくということに繋がると考える。全体として防災教育を進めていくことが一番大事だと感じる。

肥薩線の復旧・復興について

43

熊本で頑張っているカッコいい大人をぜひピックアップして、県民に伝えていくということが、子どもたちが熊本で働きたいと思うきっかけになるのではないかな。球磨川のジオパーク構想など、今後、観光面で色々取り組んでいくと思うが、肥薩線が復旧すると聞いて、でも、昔の駅はどんどんなくなっていつて新しくなっていくと思う。ただ、肥薩線というのは、鉄道のオタクの皆様の中ではすごく聖地として、すごく写真も撮りに来られている。肥薩線はいいよねと全国から言われる。それを残していくために、三角の天城鐵道っていうカフェで、本格的なジオラマを作られている方がいる。そこは海外からも観光客が来るぐらい、すごいジオラマだと。そういった方を活用しながら、球磨川の昔の肥薩線を思い出せるような観光地などができると、さらによい復旧・復興に繋がっていく、そして観光地として盛り上がっていく、熊本で頑張っているカッコいい大人も紹介できる、世界に発信できるというところで、いいのではないかな。

人口減少への向き合い方について

44

県内で20年から30年のうちに多分30万人から40万人ぐらい人口が減るという事実がある中においては、ある種、住民の方にとって非常に都合の悪い事実もどこかでお伝えするときにしなければいけないと思う。しかしそれは、悲しいお知らせではなく、それをグッドニュースに切り換えて、例えば住みかえの提案であったり、包括ケアシステムなのか、何かそういったものが、こうすることによって行き届きますよということが、きちっと言える具体的なアイデアを今後出していかなければいけないと思う。耳ざわりの良いことばかりではなかなか根本的な人口減少の課題に向き合っていけないので、まずそこを、どこかでちゃんとお伝えしていく、またそれを我が事としてちゃんと県民の皆さんにとらまえていただくことが重要と考える。

若者の未来について

45

4月頃に日本財団のホームページで18歳の意識調査が出された。日本、アメリカ、イギリス、中国、韓国、インドの6ヶ国の17歳から19歳の男女1000人それぞれ学生の合計6000人の意識調査で、自分の国の将来について希望を持てるかどうか、良くなると思うか。良くなると答えたのは中国が85、インド78.3、韓国41.4、アメリカ26.3、イギリス24.6、日本15.3。こういった統計を見ると、基本的に日本人はどうしても下位にいくというところ。それから、機会があれば留学や他国で就労してみたいと思うか、という問いについても、韓国79.3、イギリス76.7、インド76.1、中国72.6、アメリカ71.5で日本は52.8だったりとかする。自国は国際社会リーダーシップを発揮できると思うかという問いについても、中国が95.0、インド85.4でアメリカが66.5、韓国61.5、イギリス60.1で日本は40.8とか。こどもがなかなか将来や国に対して明るい未来を描けていないというところがあるんだろうなと。なかなかポジティブにものを見れないという、日本人の特性としても語られるようになってしまった。今回、国際や、共創、挑戦等を進められているというところをもって、そういったことを思えるような環境を作っていくことが非常に重要。これは熊本だけでなく日本全体の話だが、熊本もそういったところでリーダーシップがとれるよう、目指していければと思う。

46

個人的にすごい好きな「How Will You Measure Your Life?」という本がある。自分のこどもたちもそうだが、こどもたちに施すばかりじゃなくて何をしてあげないかという、そういったことが書かれている。こどもたちに色々与えるというのが、機会や経験で、失敗する経験だったりとか、そういったところを経験させてあげたらいいのではと思う。

47

自分には人に誇れる個性があるか、という質問に対しても、中国88、インド83.9、アメリカ81.1、韓国65.6、日本が53.5だとか、自分のしていることには目的や意味があるかや、将来の夢を持っているか、自分は他人が必要とされてるかという質問についても、いずれも最下位みたいな数字が出ている。自己肯定感って失敗しないかではなく、失敗しても誰からも認められるというところが重要だと思っている。例えばこういった場でも、日本でディスカッションする機会はなかなかなくて、みんなに馬鹿と思われるんじゃないか、ちょっと偏ってないかとか思われるのは怖い、という話がある。ただリンダ・ヒルが書いた本とかにもあるが、イノベーションは重労働だと。なぜ重労働かというと、みんなが想像するような外資系のいいねみたいなノリで新しいことが生まれてくるのではなく、違うだろそれみたいな話を、とにかく戦わせてから、新しいものが生まれてくるという話だと思う。若者たちにそういった経験の中で、機会だったりとかを与えていけるようなことができればと思う。

熊本の魅力について

48

熊本県の本当にいいもの、県内いろんなところにある。水もお酒もおいしい。世界で戦うためには、それらを武器として生産者、製造業、食べる場所のデザイン含め、すべてが熊本県の売りになると思う。特にそういった点を進めていただきたい。

農業振興について

49

昨年度に農水省が出した農業白書において、2000年時点で、いわゆる農業を主たる仕事として、農業に携わる人が、全国で200何十万人ぐらいいたが、昨年の時点でそれが116万人ということで、半分以下に減ってしまっている。この116万人のうち、あと20年後も農業やってくれているであろう60歳以下の人達は、この中に24万人しかいない。ということは、あと20年後には、2000年と比べたら10分の1ぐらいの人しか農業をしている人がいなくなってしまうかもしれない。これは皆さんの生活にも大きく影響を与えてくるような、大変な問題なんじゃないかなと。体感では感じないが、ニュースでも米がないとか報道されているが、このままだと本当にそういう時が来てしまうというところでは、本当に大事な産業の1つである熊本の農業を維持して守っていくことに、特に真剣に取り組まなければいけないと思っている。

50

20年後もこの熊本で「食のみやこ」を維持していけるようにするには、まず、この20年を背負っていく60歳以下の今取り組んでいる人たちを守って、強く支援していったほしいと思っている。また、外国人の方を受け入れていくことも1つ必要だと思う。ただ、外国人を受け入れるとなると、どこに住ませるのか、という問題がある。もともと農業をしている人は敷地が大きかったりして、別棟があったり、倉庫の上の小屋を改装して住んでもらったりしている人達はあるが、そういう環境がある人たちばかりではない。特に、移住して新たに農業をする人などは普通の一軒家を借りるなどしているため、敷地内に外国人の人を住ませるようなところまではなかなか手が回らないと思う。外国人を受け入れる環境作りについても、必要ではないか。

51

20年後も残る24万人のうち4割以上は、実は女性の農業者の方たちというところもあるが、農業の世界が平均68.3歳という価値感の中で生きているので、まだまだ社会活躍がなかなかできずにいる。彼女たちが、いかに社会で活躍していけるか、経営力を身につけていけるかというところも1つ大きな課題。そういった点についても、重点的に考えていただけると嬉しい。

52

もっと現場寄りの話を色々したいと思うが、そうすると、例えばもっと専門的にされている県の農林水産系の部署の方達と、もっとサイズは小さくてもいいので、特に若手農業者と意見交換などができる場を作っていただけるとありがたい。

獣害対策について

53

最近、獣害も結構多く発生している。イノシシやシカがすごく多く、解体場所が地域によってはあるが、私の地域とかにはない。みんなどうしてるかと言ったら、どうしようもない。本当はいけないが、どうしようもないからそこに置いている。重いし、運べない。でも死体を置いておくと、結局エサになってしまう。イノシシの死体を置いていたら他のイノシシのご飯になってしまうので意味がない。獣害の対策についても考えていく必要がある。

海外から選ばれる熊本について

54

TSMC第2工場までの進出が決まっており、それにより、県は経済効果を享受することが当たり前というか所与のものとして事が進んでいる。これが県の発展や県民の幸せのベースになること自体は喜ばしいが、何かそれが当たり前になっていると考えてしまうと、今後、世界から本当に選ばれ続けるのか、という観点は大事だと思う。今日の議論は、ともに県民でこどもの未来を考える、その県民の発想というのが一番大事だが、逆に世界に選ばれるという観点で考えると、今熊本にいない人が、熊本に行きたくなるのか、熊本に来て満足するのかという別の視点もまた考えなければいけない。

55	熊本でのエクスペリエンスを上げることがリピーターにつながり、それから定着につながると思う。熊本に来る、熊本に旅行する、住む、その体験を、もちろん県民の体験が一番だが、外から来る人の熊本体験を上げるという観点で、色々なことが考えられるのかと思う。
国際交流について	
56	国際交流基金作って、という話があるが、そういったことがパツとできないにしても、海外から何人か連れてきて国際交流する機会ができるかなと思っている。11月にとある大学のジャパンデスクの人が今度山鹿に来るみたいな話もあったりする。そういったところも含めて、もう少しそういった国際交流や新しい経験を身近にできる仕組みについて、官民連携できる部分もある。
文化事業について	
57	文化事業、文化政策というところの、費用対効果や経済指標に置き換えるみたいなところがすごく難しいし、長いスパンで見なければいけないと思う。
58	コーディネーター的な役割で学校に行ったときに、例えばダンスのアーティスト連れて行きますとなったとき、「じゃあこれであの子の不登校が治るんですね。」と先生がおっしゃったことがある。アーティストとしては、それは約束できない。常識的に考えたらそう。でも、それをそういう効果がありませんと明言もできない。奇跡的なことが起こるかもしれない。不登校だった子がそれがきっかけで学校に来るようになるかもしれないという可能性は持っている。でも、そこを予算化という財政の方に伝えるには、効果として伝えなければいけないから、これはこういう効果がありますと言わざるをえない。そういうジレンマも抱えている。 県の考え方として、文化事業というものに失敗はないという、攻めの施策という、一部の愛好家のためのものという認識になってしまうかもしれないが、文化という部分が、例えば教育にもすごく浸透するし、まちづくり、地域おこし、福祉の面でも、どこにでも入っていけるもの。起きたことに対する失敗、という判断はすごく今早い気がしていて、失敗と判断される基準みたいな部分が、決してそうではなくて、そういった価値基準というか考え方で、事業を考えていただけると嬉しい。
59	地域の文化を一番知っていて、コーディネートしていく役割。それは劇場にいる人だと思っている。色々なジャンルから見たときに、最後の砦になるんじゃないかなと思っている。本当にいろんな人が集える広場だと思う。本当に熊本にいろんな人材がいる。アーティストも本当はいるけれど、熊本にいけない事情があつて外に出て行く人もたくさんいる。そういった人材を確保していただき、コーディネーター、プロデューサー集団みたいなことができると、すごく面白いのではと思う。
水俣病問題について	
60	前回、水俣病をはじめ、地域性の高い問題にしっかり取り組んで欲しいという話をした。今回、基本方針の中で、水俣病への対応をしっかり盛り込んでいただき感謝。水俣病をめぐるのは、ご存じの通り現行の患者認定基準に満たない被害者の救済をどうするのかというのが長年の課題になっている。事前に配布された素案の中身で、認定審査を丁寧に着実に進めるという県の基本スタンスが書かれている。救済されるべき被害者が取り残されていたことは、原告全員を水俣病と認定した2023年9月の大阪地裁判決をはじめ、昨今の3つの裁判でも明らかになっている。これについて、水俣病に長年取り組んでいる記者とも話しているが、大阪熊本新潟の集団訴訟では、一部判断が分かれたところもあったが、司法がメチル水銀被害を認めた割合が、原告319人中179人と56%におよんでいる。いわゆるメチル水銀による被害を司法は認めているということ。認定審査だけを進めても抜本的解決にはほど遠いと思われる。県としては現行の認定基準に満たない被害者の救済にどう取り組むのか、今まさに水俣病に関しては注目も集まっており、踏み込んだ取り組みが必要ではないかと思っている。

61	健康調査に関して、国が脳磁計や磁気共鳴画像装置を使った検査手法といった研究を進めているが、被害者団体が求める調査とは溝があると思っている。健康調査をめぐるのは、熊本県が2004年の潮谷県政のときに、不知火海沿岸に居住歴のある47万人を対象とした調査を提案し、環境省が拒否したというような経緯もあったやに聞いている。被害者団体が求めているのは被害の全容解明に繋がる健康調査で、県には国の調査とこの溝を埋めるような努力をぜひして欲しいと思っている。
デジタルの活用について	
62	アナログ的な動きとデジタルをどう活用するのかがとても大事だと思っている。熊本県の公式LINEはすごく充実していると思うが、このLINEを使ってもっとアンケートの意見を聞く、発信する。県民と、それから県が繋がるツールにしていく。もっとしていけるんじゃないかなと。そのためには、今の公式LINEの友達の数が増えつつあるが、1つのKPIとしてあるのが、「県民の何%の人がLINEの友達になっているか」。それを増やしていくために、高齢者の方でも使えるようにLINE教室でサポートしていくといった地道な活動もいいのでは。
働き方の選択肢について	
63	ある意味、こういった環境でも仕事ができるというか、昔は東京に物理的に本社があるから東京に行かねばならないということがあったが、フルリモートでどこでも仕事ができる環境になってきた。
64	2020年に総務省で作られた制度に基づいた、特定地域づくり事業協同組合という、過疎地でのみできる人材派遣事業をやる組合を作った。ある日はアスパラの収穫をして、ある日は養蚕の繭を集める仕事をして、ある日はワイン用ブドウの収穫をして、ある日は宿泊対応や企画をやってもらったりしている。昨年から今年にかけて1年で、4名、県外から移住しており、そういった働き方や選択肢がどんどん出てきている。
庁内での連携について	
65	部局を超えた有機的連携を進めていく、それにより効率化を図っていくという話だったが、この縦と横で推進するプロデューサー的な役割が必要だと思う。連携といっても、全体を進めていく強力なリーダーシップを持ったプロデューサーというのはどうしても必要かなと。ここで挙げられている色々な施策でも、1つ1つ目標をあげていくことも大事だと思うが、全体の総和としてあげていくという両方が必要。 最近、小さな自治体でも、みんなの未来課みたいなものを作って、そこにプロデューサーを集めて自由に動くようなまちができており、そうしたプロデューサー的な役割というのは大事だと思う。
66	プロデューサー集団みたいなところはすごく大切だと思っている。自分自身が劇場に勤めていて、その劇場にいる人材というところの活用をちょっと考えていただきたいと思う。
デザイン力について	
67	論理的・知性的なスキルに加え、直感的・感性的な美意識というのが、熊本が世界から愛される、色々な人たちから愛される、ファンができてくる、ということに対して非常に大事。デザイン力が上がっていくと経済効果も必ず上がると、それはもうまモンという本当に完成されたデザイン力で皆さん実感されてると思う。例えばインキュベーション施設として、熊本に夢挑戦プラザ21があると思うが、ちょっと言葉を選ばずに言うと、名前やデザイン、インテリアなど、何かこうワクワクしないと。 福岡はスタートアップ都市宣言ということで、日本でも若者の起業率がナンバーワン。中心になっているのが福岡グロースネクストという、廃校となった小学校をリノベーションした施設。行くだけでワクワクして楽しくなる。熊本がグローバルに競争していく、それから人材も良い人材を取っていくためには、このデザイン力というものを、ごみ箱ですらデザインが格好良くてみんなそこにごみを入れるみたいなものもあり、そういったことを注力していただければと思う。

計画の分かりやすさについて

68

自分が言ったことなども反映していただいて本当にありがたいと思うが、これをパッと見たときに、いわゆる役所的なフローチャート図。行政の方はよく見る形だから分かると思うが、パッと見たときに、難しい。

行政のスピード感について

69

宇土市役所にいてびっくりするのが、時間がすごいかかること。ある小学校から、このバス停はこどもが危ないから近くにバス停を1つ作ってくださいと。でも、僕の感覚で言うとなら来月作りましょうか、みたいな感じだけれども、警察だったり、国道だったり色々絡んで、頑張って2年後にはバス停作りましょうみたいな。ちょっとびっくりしたが、それが今の市役所のスピード感なんだと。これは別に市役所の方がサボってるわけではなくて、色々なことが絡み合ってます。バス停1つ作るのに、最速でもやっぱり1年2年かかってしまう。そうすると、今困って相談があった小学校5年生の方はもう卒業しちゃうみたいな。その制度制度と、いいところまで行って警察署長がやっぱりここは横断歩道を作らなければ駄目だって。1つ横断歩道作るのにまた3年かかるみたいな。これじゃもうどうしようもないなってやつで、法の目をくぐるわけじゃないが、例えば今、国交省とか、ライドシェアみたいなものが、もし、うまいこと自由に、規制とかがかなり緩いものになるのであれば、今困ってる人たちは相当早く行けるかなと。本当に時間がかかるな、今の制度と見た次第。

70

色々な分野の方が話すことで、発想と発想が結びつき、こういう風にすればいいよねとアイディアが出る。今までのやり方というのは、今仰ったように2年、3年かかりますよみたいな話になって、でもそれには行政、許認可、制度施行などロジックがあるはず。それを熊本がスピードを上げてゴールから逆算して、乗り越えるやり方をできたりしないものか。

KPI及び効果検証について

71

KPIを1つ設定してしまうと、それが本当に目指してるところを体現するKPIだったらいいが、失敗の判断の基準等も含め、あまり早く見極めすぎると、目的を達成できないとか。限りある資源の中、行政として成果を図っていかなければいけないが、行政の皆さん真面目で、1回設定したらマルかバツかみたいなことでやっていくので、それだけが独り歩きするともったいないことにもなりかねない。みんなで魂を込めている行政の施策なので、どうやって大きく育てていくかという点での測り方、そしてどうやって振り返るかという点についても、中身と同じように知恵を絞り、今後検討していく方が良いのでは。